

中央教育審議会高大接続特別部会（9/17）における主な意見

- 自分から知恵を絞り、何かをゼロから創り出し、他人を説得してまで仕事を成し遂げていこうとする力が弱いと言われることについては、全く同感。この点については、産業界も反省している。高校教育において、主体性・多様性・協働性、社会性・市民性、知識・技能が身に付けられているという点が高大接続の議論の出発点として重要であり、普通科や専門学科に関係なく全ての高等学校できちんと社会人として独立できる力を養って欲しい。そういう人が高等学校の区分によらず社会にも大学にも行くのがあるべき姿である。
- 基礎・発展とも難易度を幅広く作るのであれば、各大学は、学力を改めて評価することなく主体性・多様性・協働性を評価できると思う。また、アドミッション・ポリシーには、具体的な評価方法と比重、要求するレベルをぜひ明示してもらいたい。
- 主体性・多様性・協働性がどのようにしたら評価できるかが問題。そのような能力を測ることが望ましいことは分かっているが、アドミッション・ポリシーで主体性等を書いたとしても、客観的な基準がない。
- 選抜性が高い大学では、達成度テストに十分な選抜機能があるのかどうか気にしている。やはり、具体的に問題の内容が分からないと判断しがたい。
- 高校教育においては、主体性・多様性・協働性の育成がかなり進んできているとは思いますが、その能力を育成しても、現状の入試は突破できない。ここのギャップは歴然としている。学力不問で学生を入学させるような大学があるが、本来は、大学が求める人材を受け入れるべき。しかし、そうすると少子化の中、大学の運営に支障を来す。このような状況では、大学が学生に対して行いたい教育が出来ない。私立大学がほとんど学力不問で学生を入学させていることについての議論が無い中で、達成度テストを導入しても何も変わらない。
- 達成度テスト（発展レベル）を社会人や既に大学に在籍している学生等、誰でも受けられるようにすることが適当とあるが、大学志願者以外の者が何のために受けるのか分からない。
- 大学教育は、ディプロマ・ポリシーを前提にカリキュラム・ポリシーを定め、カリキュラム・ポリシーを前提にアドミッション・ポリシーを定めるものであるため、「必要性・背景、課題」には、入学から卒業まで書き込んで欲しい。京大で導入予定の特色入試では、高い志等を経験するとあるがどのようにしてそれらを測るのか、先進的な事例にもなると思われる。
- 大学の退学率が高いことが悪いことなのか。大学が教育しようにもアルバイト等しなければ教育を受けられない。そういう学生には単位も出せない。学生がアルバイトをしなければならぬ状況が学修時間の減少の要因の一つに考えられる。履修についても、単位の取りやすい教員に集中するところがあるが、学生がきちんと学ぶ状況を作ることも必要なの

ではないか。

- 日本の学生の4割が推薦、3割が個別試験、3割がセンター試験で大学に入学している状況は、諸外国に比して特異的な状況なのではないか。推薦・AO入試の大半で学力が無い学生が大学に入学していることは恐ろしいこと。一般入試で入学する学生の学力も落ちている。大学教育が機能しているか疑問を持っているが、その要因として、大学に入学すればほぼ100%卒業できる仕組みがある。大学は、受け入れる学生の質を選ぶというところに焦点を置くべき。
- 小学校、中学校、高等学校、大学という一連の教育システムの中で、高等学校及び大学入試において、必要なことが身に付いているかチェックする仕組みも取り入れるべき。生徒及び学校の多様性に伴い、チェック機能が欠落してきた。
- 熱心に教育している高等学校とそうでない高等学校の差が歴然としている。子供達が、やりたいことを持って、小学校、中学校、高等学校で学び、大学に入学し、そして卒業させるべきである。また、学校・家庭の在り方についても考えるべきである。
- 発展レベルは、できれば業者テストのような1点の差で判断するのではなく、もっと大きな括りで判断するようなものにし、子供達が自ら希望して受けられるようなものにして欲しい。一番大事な事は、子供達が小さな頃から学び方を身に付け、大学で学びたいと思えるような仕組みにして欲しい。
- これまでも、知識・技能の活用力は、確かな学力があつてのもの。その上で、達成度テストを導入すれば高校教育は変わると思うが、主体性・多様性・協働性をどのようにして測るのか分からず、高校教育への影響が予測できない。また、主体性・多様性・協働性を評価する選抜は募集人員の一部での実施と認識。
- 諸外国においては、良き国民を育てるということはあるが、資料2では、市民性とされている。なぜ市民性にとどまっているのか。市民性でとどまるのでは小さいと思う。また、文部科学省には、英語、日本語を使う場面を考えてもらいたい。国民が読んでもカタカナ英語は分からない。簡単に日本語に直せると思う。
- 高等学校の進学率が約98%となっているのは、国として、進学希望者は全て入れるという方針があつたから。また、義務教育は行かなくても卒業できるようになっている。人口が減少傾向にあるのに学校の数は変わっていないため、学生が学校を選ぶようになっている。高等学校においては、就職させるよりも進学させる方が楽なところもある。ただ、大学に受け入れたからには大学にも教育する責任がある。
- 高校教育は、責任能力のない未成年者に対して行うものであり、大人になった際に責任をとれるような人材育成を行っている側面があることから市民性としている。これまでこの観点での議論がなかったため、社会性を身に付けさせるという議論が出たのは良いこと。

- 主体性・多様性・協同性等を観点に選抜するのであれば、公平性・透明性を検討する際、今までとは違う感覚を持っておく必要がある。入社試験に、公平性・透明性はない。大学入試も入社試験のようなものになりつつあることは押さえておかないといけない。
- 高い透明性、公平性を保つなら非常に難しいが、主体性・多様性・協同性には色々な考え方があつたため、もしかしたら共通の基準を設けない方が良いのかもしれない。むしろ、選抜のプロセスが重要になるのかもしれない。追跡調査の結果、どういう試験ならこういった成果が得られるといったようなプロセスの評価があれば、試験方法自体を評価してよいのではないか。その上で、プロセス自体は多様であつて良い。
- 本部会の議論の遡上に上がらない子供達のこと重要であり、地域社会の活性化は必須である。また、リーダーも必要。国を動かすために必要な学力と地域を動かすために必要な学力の育成・学び方は違う。専門性の高い学びを中学から希望する子供がいる。多様な学びの中から選択できるように親の意識を変えることが望ましい。
- 基礎レベルについては、高等学校では必須にして欲しい。テスト結果を踏まえ、教員が生徒の学びの意欲をかき立てるような指導をして欲しい。多様な子供達がいる中で、みんなに学びの場があるということをして欲しい。本部会では、優秀な子供ばかりがフォーカスされている。
- 理系・文系というのは、子供達の選択の幅を狭めている。英語よりも数学の成績の方が良いから理系を選ぶという安易な考えに基づき選択すると失敗する。子供達にとって、いいものになるようにして欲しい。これまでの問題と新しい問題が出題されることとなれば、子供達が何を勉強すればよいのか戸惑う。
- 知識・技能の習得及び活用力、ゼロから何かを創り出す力、また力が追いつかない子供についても考える必要がある。入試については、一律に人物重視に変えるのかというところではなく、知識・技能の習得も見る。選抜の透明性・公平性・公正性については、結果と異なりプロセスの透明性を打ち出すことが大事。今後は、入試を手段として、多様な生き方に対応できる複数路線を考える。なお、社会性・市民性というのが高等学校現場では浸透していると思うが、言葉をきちんと精査すべき。

以上